

# . 調査の結果

## 第1章 日本大学学生の基本的特性

### 1. 性別

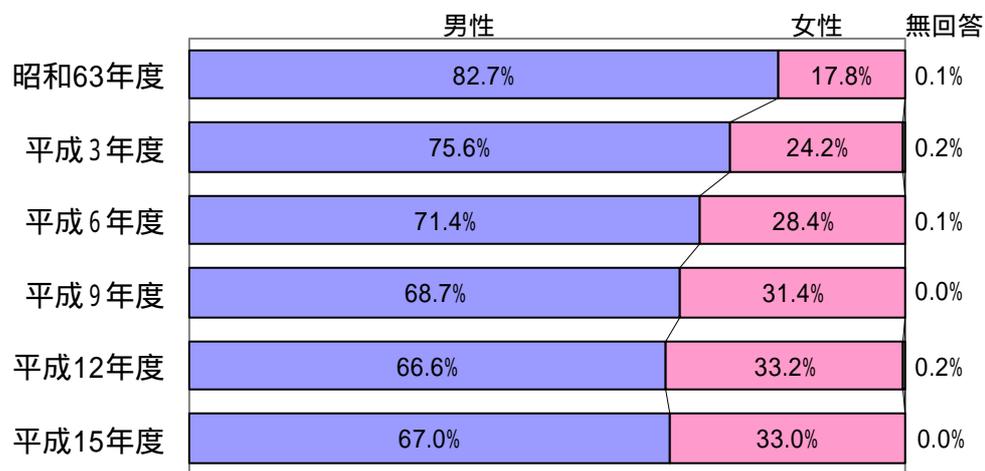
#### (1) 性別の経年変化

14学部昼間部における女子学生の比率は増加傾向にあり、平成15年度では全体の33.0%を占めている。

全学生に占める女性の比率をみると、昭和63年度(17.8%)、平成3年度(24.2%)、平成6年度(28.4%)、平成9年度(31.4%)と年々3~6ポイント程度上昇しており、平成12年度は33.2%で、昭和63年度の約2倍に増加している。平成15年度も33.0%を占めている。

ただし、この比率は調査回答者の男女比であり、実際の本大学の男女比とは必ずしも一致しない。

図1-1 男女別比率の経年変化



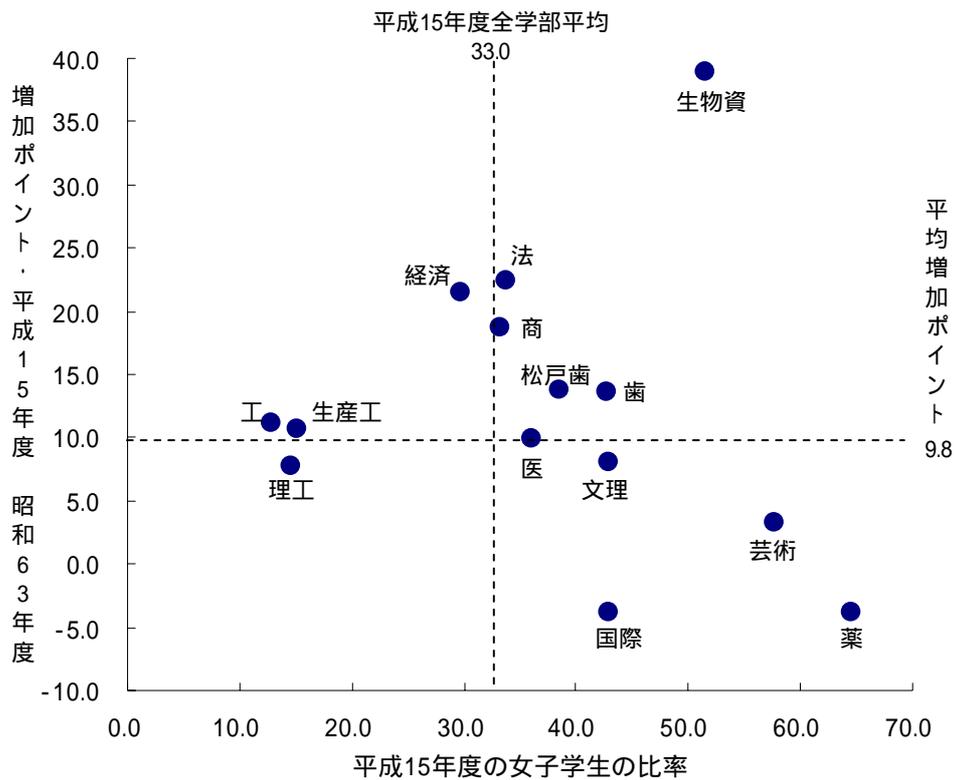
(2) 学部別女子学生の比率

女子学生の比率が高く、かつ急増しているのは生物資源科学部である。一方、比率が低く、かつ増加量の少ないのは、工学部、理工学部、生産工学部である。

横軸に平成15年度の女子学生の比率、縦軸に増加ポイント（平成15年度 - 昭和63年度）を表したものが図1 - 2である。

生物資源科学部の女子学生増加ポイントは38.9%でかなり高く、法学部（22.4%）、経済学部（21.5%）、商学部（18.7%）がそれに次いでいる。一方、工学部、理工学部、生産工学部では女子学生の比率も増加ポイントも低い。また、平成15年度において女子学生の比率が高いのは、薬学部（64.5%）、芸術学部（57.7%）、生物資源科学部（51.5%）である。薬学部、芸術学部、国際関係学部の3学部は、昭和63年度の時点で女子学生の比率が50%前後と高い比率である。一方、生物資源科学部は12.6%から51.5%にまで女子学生が急増している。

図1-2 女子学生の比率と増加ポイント



< 女子学生の増減 >

	全体	法	文理	経済	商	芸術	国際	理工	生産	工	医	歯	松戸	生物	薬
(A) 昭和63年	23.2	11.4	34.8	8.2	14.6	54.5	46.9	6.9	4.4	1.7	26.2	29.2	24.7	12.6	68.4
(B) 平成15年	33.0	33.8	42.9	29.7	33.3	57.7	43.0	14.6	15.1	12.8	36.1	42.8	38.5	51.5	64.5
(B)-(A) 増加分	9.8	22.4	8.1	21.5	18.7	3.2	3.9	7.7	10.7	11.1	9.9	13.6	13.8	38.9	3.9

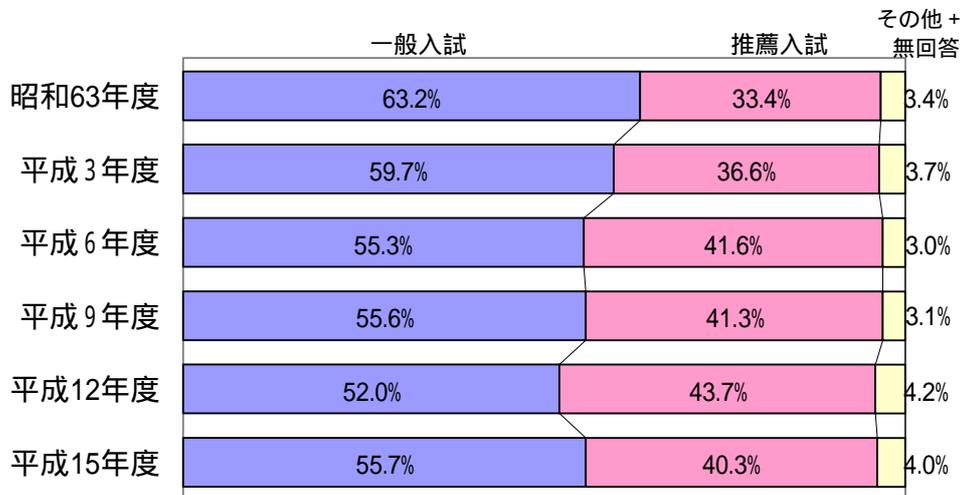
## 2. 入学状況

### (1) 推薦入学者の経年変化

推薦入学者の比率は増加傾向にあったが、平成15年度は40.3%となり、前回調査よりも約3ポイント低下した。

推薦入学者の比率は、昭和63年度(33.4%)、平成3年度(36.6%)、平成6年度(41.6%)、平成9年度(41.3%)、平成12年度(43.7%)と増加傾向を示していたが、平成15年度の調査結果では40.3%と減少した。

図1-3 入学状況の経年変化



(注) 一般入試：一般入試(現役入学)、一般入試(1年浪人)、一般入試(2年浪人)、  
一般入試(3年以上浪人)、センター入試(現役・浪人)

推薦入学：推薦入学(指定校推薦)、推薦入学(公募制推薦)、推薦入学(付属・準付属推薦)、  
推薦入学(体育推薦)、AO入試(15年度より追加)

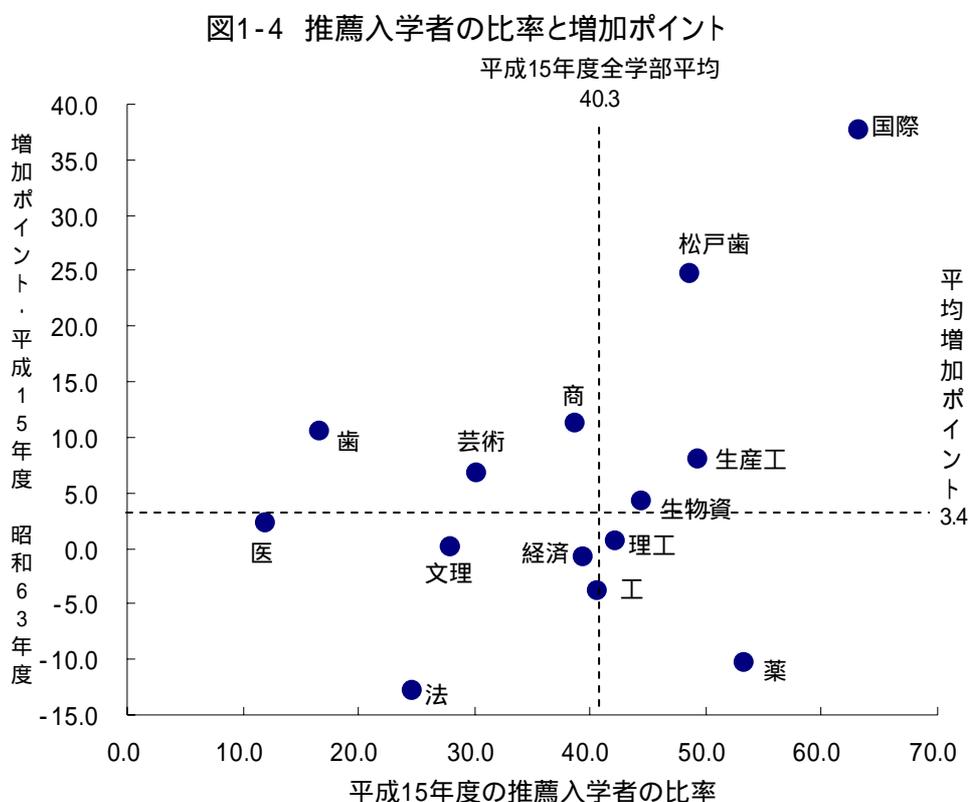
その他：編入学・転籍・転部(二部から一部へ)、留学生入学、帰国子女入学、その他

(2) 学部別推薦入学者の比率

薬学部と国際関係学部は、推薦入学者の比率が50%を超えている。

横軸に推薦入学者の比率、縦軸に増加ポイントを示したものが図1 - 4である。

平成15年度における推薦入学者の比率が高いのは、国際関係学部(63.3%)、薬学部(53.3%)、生産工学部(49.3%)である。逆に、比率が低いのは医学部(12.0%)と歯学部(16.7%)であり、特に医学部については昭和63年度からほとんど変化していない。増加ポイントが高いのは国際関係学部(37.6%)、松戸歯学部(24.7%)であるが、そのうち国際関係学部は推薦入学者の比率も増加ポイントも高い学部となっている。



< 推薦入学者の比率の増減 >

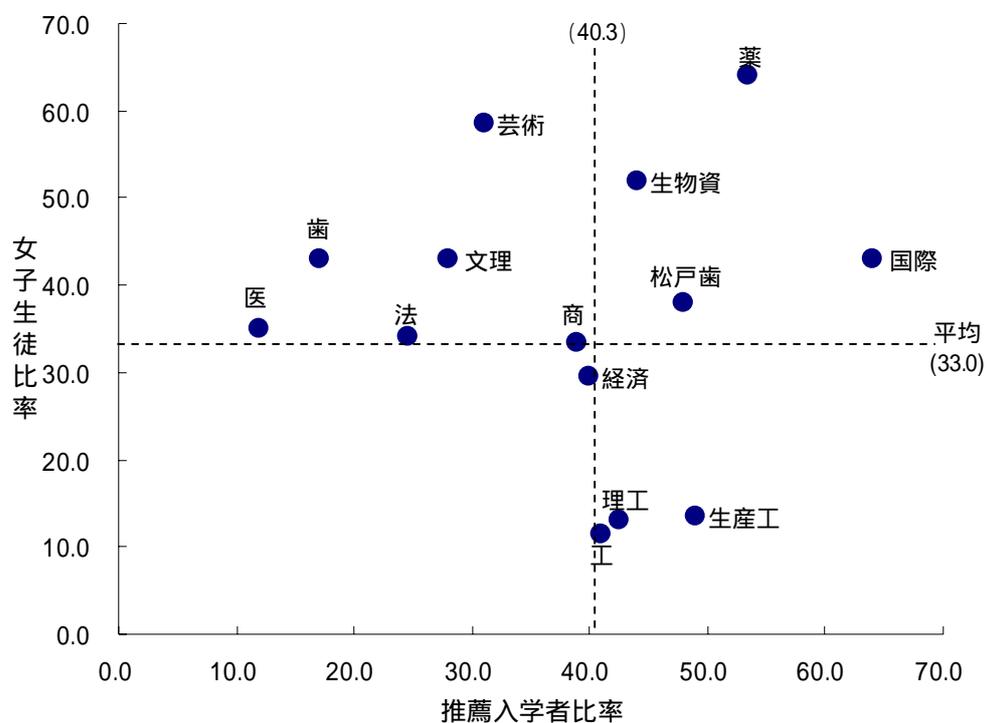
	全体	法	文理	経済	商	芸術	国際	理工	生産	工	医	歯	松戸	生物	薬
(A) 昭和63年	36.9	37.5	27.8	40.2	27.5	23.5	25.7	41.5	41.3	44.4	9.8	6.2	23.9	40.1	63.7
(B) 平成15年	40.3	24.7	27.9	39.4	38.8	30.2	63.3	42.2	49.3	40.6	12.0	16.7	48.6	44.4	53.3
(B)-(A) 増加分	3.4	12.8	0.1	0.8	11.3	6.7	37.6	0.7	8.0	3.8	2.2	10.5	24.7	4.3	10.4

ちなみに平成15年度調査結果から女子生徒比率と推薦入学者比率の相関をみたのが図1 - 5である。

推薦入学者比率の高い薬学部、生物資源学部では女子生徒の比率も高い。しかし、生産工学部、理工学部、工学部は推薦入学者比率が40%を超えていても、女子生徒の比率は20%以下と低い結果となっている。

逆に、医学部、歯学部、法学部は推薦入学者比率が30%以下と低いが、女子生徒比率は40%前後を占めている。

図1-5 平成15年度女子生徒比率と推薦入学者比率の相関

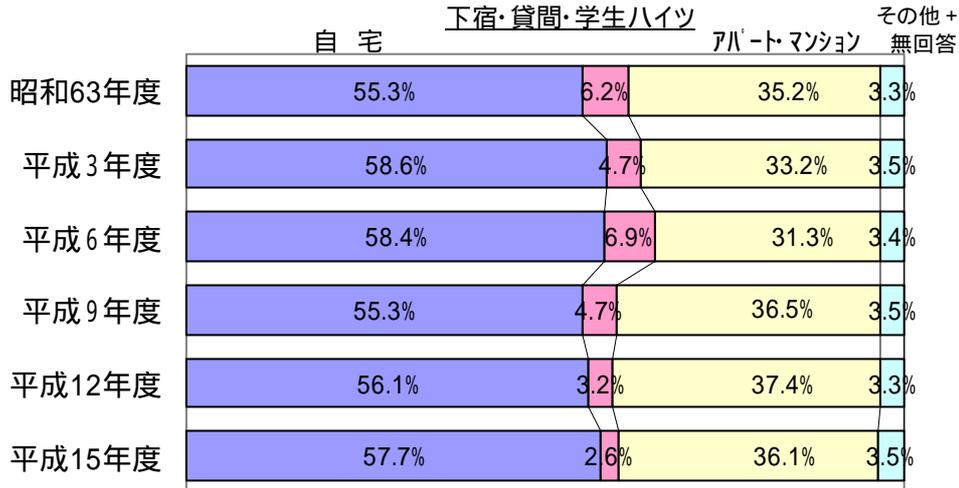


### 3. 住居形態

自宅からの通学者が57.7%で最も多く、アパート・マンションが36.1%で続いている。

平成15年度における住居形態をみると、自宅(57.7%)、下宿・貸間・学生ハイツ(2.6%)、  
 アパート・マンション(36.1%)、その他(3.5%)となっている。

図1-6 住居形態の経年変化



(注) 昭和63年度と平成3年度の分類「下宿」「貸間・アパート・マンション」  
 平成6年度と9年度の分類「下宿・貸間」「アパート・マンション・学生ハイツ」  
 平成12、15年度の分類「下宿・貸間・学生ハイツ」「アパート・マンション」

#### 4. 通学時間

通学時間15分以内の近距離通学者が約1/4を占めている。

平成15年度における通学時間は、15分以内(22.5%)、16-30分(12.2%)、31-60分(22.0%)、61-90分(24.0%)、91分以上(19.3%)で、15分以内の近距離通学が約1/4を占め、前回調査結果とほとんど変化はない。通学時間の経年変化をみると、通学時間が30分以内の近距離通学者がやや増加傾向になるものの、全体としては大きな変化がなく、学生の居住区域が時間距離的には一定しているといえる。

図1-7 通学時間の経年変化

	15分以内	16-30分	31-60分	61-90分	91分以上	無回答
平成3年度	20.8%	10.4%	25.6%	23.0%	19.8%	0.1%
平成6年度	22.7%	10.8%	22.0%	23.1%	21.2%	0.1%
平成9年度	24.0%	11.2%	21.9%	21.6%	21.2%	0.2%
平成12年度	23.0%	12.0%	21.8%	22.8%	20.3%	0.1%
平成15年度	22.5%	12.2%	22.0%	24.0%	19.3%	0.2%

(注) 昭和63年度の調査では、上記内容についての質問はしていない。